
鬼遊び

九九ノ字 佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼遊び

【Nコード】

N7190Y

【作者名】

九九ノ字 佳

【あらすじ】

森の奥で迷子になっていた幼い頃の私を助けた「彼」との約束。それが全ての始まりだった。 人と妖怪の少し歪んだ恋愛話です。

昔の約束

町の人工的な明かりが無くなる森の奥。

夜の時間帯に姿を照らすのは月明かりのみ。

そんな時間帯に森の奥で迷子になってしまった幼い頃の私に

現代では見ることが少なくなってきた着物を正しく着こなした「彼は笑いながら言ったんだ。

「僕とある約束をしてくれるなら助けてあげますよ。どうします?」

幼い頃の私は優しくそうで、人が安心するような笑顔と早く帰りたいという思いから

「彼」の言葉に頷いていた。それが間違いだと気づくことすらしよ
うとせずに。

知らず知らずのうちに私は取り返しのつかないことをしてしまった。

私と「彼」の約束は

「それでは16になったら迎えに行きます」

共に生きていくことであつたからだ。

1 - 1話 まえぶれ

白い梅木は赤染まる

ゆらり ゆらりと

人、地に落ちた

オニゴッコ

いつも通りの朝だった。

自分が病気になったわけでもないし、

親や友達が怪我をしたわけでもない。

特に何かがあったわけでもない普通の朝だった。

だけど

どうしてか私はおかしかった。

一つ、一つの動作にもびくびくしてしまつて体。

友人に声をかけられただけなのに

どくどくと激しく動き出す心臓。

回りの視線に恐怖が止まらない。

どうして

こんなにも

不安になるのかわからなかった。

学校に行く道の途中で

泣きそうになる。

自分が自分じゃないような気がして立ち止まりたくなつた。

1 - 2話 不安

鬼の子 クスクス

笑うて 人の子

追いかける

オニゴッコ

ガクガクと震えている足と

弱音を吐いている自分の心に

気合いをいれて歩き出す。

もうすぐ学校に着くんだからと

心の中で暗示のように繰り返しているが

それでも不安は残っていた。

学校に着けば

私のことをよくわかってる友人や

大好きな恋人がいる。

早く学校に着いて

咲や健太に

励ましてもらおう。

どうやって甘えようかと考えながら

歩いていると思いのほか早く学校が見えてきた。

学校が見えてきたことに安心したせいか

さっきまでずっと自分の心の中にあっただ不安が薄れたように思う。

だからだろうか。

私が後ろから伸びてきていた手に気がつくことができなかつたのは。

1 - 3話 知らない手

捕まえた

捕まえた

鬼の子 一人

上機嫌

オニゴッコ

ようやく落ち着いてきた私は安心しっぱなしだったらしい。

回りに気を配る余裕はなく

簡単に

ぐいつと後ろから

自分を抱き締めるように伸ばされた手に

捕まってしまった。

逃げられないようにと力を込められて

抱き締められているせいか

少し息苦しい。

知っている人なら

まだしも

私を抱き締めている手に見覚えはなく、
焦りながら必死になって

私はもがいた。

健太に見られたら

怒られるし

痴漢だったら怖いからだ。

だけど、女の力ではなかなか外れない力で抱き締められているらしい。

私が押し退けようと力を込めても
びくともしなかった。

「い、嫌。はなしてよ」

泣きそうになっている私の声に気がついたのか

後ろの人は腕をゆっくりはなし
捕らえていた体を解放する。

ほっとして

その人から急いで距離をとり

誰がしたのかと

振り返ってみると

そこにいたのは

穏やかな笑みを浮かべる

「彼」だった。

1 - 4 話 約束

泣き叫ぶは

人の子よ

助かることは

無いと知る

オニゴッコ

白い短めの髪。

赤みがかった桃色の目。

少し幼い顔立ち。

薄い水色の

現代では見ることが少なくなってきた着物。

その上から羽織っている梅の花が描かれた羽織。

優しそうな笑み。

懐かしい記憶通りの「彼」がそこに立っていた。

何も変わっていない。

あれから何年もの月日がたったはずなのに一つとして変わっていない「彼」に

恐怖が芽生える。

「迎えに来ましたよ」

笑いながら「彼」は言った。

どうしてかわからないが

近づこうとしないところが気味悪く感じる。

逃げ出しても簡単に捕まえられるということなのだろうか。

「迎えて、本当に？」

一歩後退りながら私が聞くと

「彼」も一歩踏み出して距離をもとに戻しながら答えた。

「はい。約束のこと、忘れたとは言わせませんよ?」

同じ笑顔のはずなのに

恐怖しか感じないのは

「彼」の目が笑ってないからだろうか。

「だ、だけど……私達名前も知らないんだよ?」

「今、知れば問題ありません。ちなみに僕は 白梅 葉月 で
す」

ああ言えばこう言う

ってこんな状態の事を言うんだなと思いつつながら

言い返そうとしたとき

「何やってんだよ」

大好きな恋人の声が聞こえてきた。

1・5話 出会う

歪み 歪んだら

もうもとに

戻ることはない

オニゴッコ

声のした方を向くと

わかっていた通り恋人である健太が鞆を手に

私達を見ていた。

私はつい、健太が通りがかった事に感謝しなくなった。

一人だったなら「彼」

確か、白梅さんだっけ？

の相手はできそうにない。

そんな風に思っていると

「何やってるんだって聞いてんだけど？」

健太は私達が二人とも
答えないことが

気に入らなかつたのか

顔をしかめながら

さっきより少し強めの口調で
もう一度問いかけてきた。

私は慌てて

答えようと口を開くが

「貴方には関係ありませんよね？」

白梅さんの方が先に答えてしまう。

「何、言ってるんですか！白梅さん」

そう言おうと

視線を白梅さんの方に戻すがすぐにそれを後悔した。

白梅さんは

いつもの笑顔じゃなく

無表情でどこから取り出したのか日本刀を構えていたからだ。

1 - 6話 恐怖

誰かに

見られるくらいなら

自分の手で

折ってしまおうか

オニゴッコ

白梅さんは刀を

構えたまま動かない。

そんな様子を見ながら

どこから刀を出したのか、とか

何で刀を持っているか、とか

いろいろ聞きたいことも

言いたい事もあったけど

どれも口には出すことはできず

心の中で消えていった。

「邪魔ですね」

ぼそりと

誰に言うわけでもなく

白梅さんは呟いた。

「はあ？」

健太が訝しげに声をだすが

白梅さんは気にした様子もなく続けて呟く。

「彼女のそばにいていいのも、触れていいのも、話しかけていいのも、見ていいのも、全部僕だけなのに」

その声音に

まるで冷たい手で直接なげられたように
ぞわりと寒気がした。

だけど、健太は恐怖を感じたわけではないらしく

怒ったように

「ふざけてんじゃないやねえぞ、お前。こいつは俺のだ！」
私を引き寄せながらそう言った。

その様子をきよとんとしたような目で白梅さんは見ていた。
何故か、すごくいたたまれない気分になる。

「し、白梅さん？」

その声をかけた瞬間、

「ふふ…ふふふ……あはははははははっ」

白梅さんは笑いだした。

1 - 7 話 笑顔

散らせ 散らせ

命の花を

自分の言葉で

散ってしまえ

オニゴッコ

刀を構えたままの手を動かすことなく

さも可笑しいことを

言ったというかのように

笑い続ける白梅さんを見ていると

体が反射的にあとずさってしまった。

「な、何だよ。気持ち悪い」

健太もこれには

気味悪く感じたのか

同じように顔をひきつらせて

あどずさっていた。

白梅さんは私達の反応には興味がないのか

気にした様子もなく

刀の握り直した後、笑顔で言う。

「…あなたのもの？…ふふっ…なに言ってるんですか。ふざけるのもいい加減にしてください。」

殺すぞ、童」

その笑顔を見た瞬間、

恐怖がよみがえり

つい私は体を抱き締めてしまう。

私、さつきから怖がってばかりな気がする。

なんて

考えて現実逃避をしてみても

現状は悪い方向にしか動かなかつた。

1 - 8話 失踪

大切なものは

手の中 いれて

壊そうか

オニゴッコ

カチャリ っと刀を握り直しながら妖艶に微笑む白梅さんと

恐怖で動けなくなった私達。

だけど、やっぱり白梅さんは私達を見ようとせず

空を見ながら自分にたいして呆れたように

「…童ごときに時間を使った僕が馬鹿でしたね。もう、貴方は必要
ありません」

そう言った。

白梅さんがそう言った後だったのか前だったのか

よくわからなかったが

言葉が聞こえたと思った時には

もう、健太の首から上と下は

繋がっていなかった。

血が飛び散り、

重力に逆らうことなく

崩れ落ちていく体。

目の前が真っ黒になったような気がした。

現実味のない、

まるでテレビを見ているような気分でもあった。

白梅さんにとっては

何でもないことらしく

健太の頭を踏みつけながらなお愉快だと笑っている。

その日、

真島 健太 死亡のニュースと

私、涼風 さち

失踪のニュースが

各地で流れたのだった。

2 - 1話 始まり

カタリ コトリ

家の中は

誰にも見せまい

レンカ

自分からと言うよりは

連れ去られる形で

白梅さんに

連れてこられたのは

山の奥の奥にある小さな町だった。

そこで、始まった

白梅さんとの無理矢理な

新婚生活。

もう逃げ出したいと

何度、思ったことだろうか。

だけど、逃げれるわけもなく

私はどうなっていくんだろうと

今日も不安になるのだった。

桜が咲いたら

二人で寄り添い

向日葵が咲いたら

共に歩き

秋桜が咲いたら

言葉を交わし

雪が降れば

愛しあう

これは

物語ではなく

一つの恋歌 レンカ

私達の歪んだ恋のための歌だった。

2 - 2 話 執着

愛す事は

誰にも

咎められたりは

しない

レンカ

連れ去られる形で

やって来た山の奥の奥にある町の

白梅さんの家と言うよりは昔のお屋敷のよつな所。

その一つの部屋に放り込まれてから

一週間たったはずの今日まで

私は一度も外に出させてはもらえていない。

白梅さん以外の人と話すのも駄目らしく

お屋敷のお手伝いさんらしき人も

白梅さんの友達らしき人も

部屋に来たとしても

見るな

話すな

と言われているほどだ。

何処かから逃げ出そうと思っても

窓には鉄格子だし

唯一の入り口である襖の扉の前には見張りがいる。

私を逃がさないようにと徹底的に私を閉じ込めているのだろう。

その執着のような何か私には怖かった。

2・3話 歪んだ愛（前書き）

白梅さん視点。

長い話になりました。

2・3話 歪んだ愛

赤い花を

体に散らし

逃げれぬようにと

鎖をつけよう

レンカ

彼女を最初に見かけたのは

僕達が住む森で迷子になっている姿でした。

迷子になって不安になっていたのでしょうか。

小さな体を震わせ、涙を流している姿は

どこにでもいる子供のようにも思えました。

だけど、それは思い違いだったのです。

彼女は

他の子供達のように大声で泣き叫ぶのではなく

泣き声を出さないようにと唇を噛んで我慢していたのです。

子供らしくない子供。

それが彼女の第一印象でした。

「……おかあさん……おとうさん……」

そう口にだしながらも

彼女は回りを見ることすらしてませんでした。

特別なものだけにしか

心を動かさないとでも言うのですか、彼女は絶対に信じていたのでしょう。

親が迎えに来るのを。

やはり彼女は子供らしくない子供だと

僕は心の中で思った反面

その姿が余りにも

可愛らしいと思ったのです。

世間一般から言われる子供と違い

真っ白なままの彼女。

きっと将来、大人になったとしても変わらないであろう彼女を考えただけで

その特別になりたいと

その子が欲しいと

心が叫んだ。

まだ細い足に足枷をつけて

牢屋に閉じ込めて

愛を囁くのもいいかもしれないですが

今ここで彼女を縛り付けるのはいけないと考え直しながら、僕は友が言っていた言葉を思い出しました。

「言葉には魂やどる。だから、気おつける」
今、思えばどうして

そんな事を言われたのか
忘れましたが

その言葉のおかげで

約束してしまえばいいんだと気がついたのです。

言葉に魂がやどるなら

約束を了承したとき、契約が結ばれるはずだからです。

だから、僕は彼女にこう言いました。

「僕とある約束をしてくれるなら助けてあげますよ。どうします？」
と。彼女は絶対に頷くとわかっていました。

これで彼女は僕のもの。

あれから、
彼女が16になるのをどれほど心待ちにしていたのか自分にもわかりませんでした。

やっと手にいれた彼女。

逃がさないようにと

囚人のように閉じ込めて

誰にも話しかけないよう

誰も見ないように言い聞かせ

永遠に

僕しか必要としないようにしてあげましょ。

2・4話 自業自得

苦しむときも

悲しむときも

いつだって

きみのそばにいたい

レンカ

ぎしりつと音をたてて軋むベッド。

そこに押し倒されている状態の私の目の前にはにこりと
いつも通りの笑みを浮かべる白梅さんがいる。

どうしてこんな事になっているのか私はまったくわからないでいた。

少し前に時間を戻して考えてみよう。

今日と言う日もやはり

いつも通り外に出してもらえない日だった。

毎日、家の中にいる

と言うのは何とも退屈なこと

そろそろ外に出て遊びたいという思いもでてくる。

だが知らぬ土地で一人で放り出されてもどうしようもないと今さら
気づく。

どうして一週間前にそれに気づかなかったのは

どこかに置いてくとして

つまり私は今日、逃げ道を探すのではなく

逃げ道に役立ちそうな地図などがないか探すことにしたのだ。

だが、私はこの時

白梅さんに

。 見つかることを少しも考えていなかったのである。

本棚や机、筆筒に押入れ。

どこを探しても地図らしきものはでてこないから

私が諦めようとしていたとき

「何をしてるんですか？」

綺麗なアルトの声が私の後ろから聞こえてきた。

びしっと体が強張る。

その声が今、一番聞きたくなかった声だったからだ。

「し、白梅さん……………」

小さく呟いた声なのに

「はい、何ですか？」

と律儀に答える彼に何も言えなくなる。

すぐに居心地の悪い沈黙が流れた。

先に沈黙を破ったのは白梅さんのほうだった。

「そついえは何を探していたんですか？」

今、最も聞かれたくないことを白梅さんは聞いてきた。

私はあまり上手に嘘をつけるわけではなく

私の企みがばれたあと

白梅さんのおつた行動が

今の状態に繋がる。

つまりよく思い出すと
私の自業自得だった。

2 - 5話 不明な心

折った花にも

水をあげ続けて

育てていこう

レンカ

白梅さんは左手を

恋人のように自分の手と絡ませながら私を押し倒したまま

余った右手でなぜか私の髪をなで続けている。

回りから見ればイチャついてるように見えるが

そんな甘いものではないと私は思う。

そんな状態のまま何分間かたった頃、

ようやく白梅さんが手の動きを止めた。

ほっと安心したように私は息をはいてから

近くにある白梅さんの顔を極力見ないように遠う方に顔をそらす。
さっきまで髪をなでられていたから動くにも動けなかったのだ。

だが、白梅さんはそれが気に入らなかつたらしく
顎に手をかけぐいっと
強制的に自分の方に向けると

ほんの数センチほどの距離まで近づき言った。

「僕以外に興味をしめすのは嫌です。僕だけを見ててください」

それはただっ子のような言葉だった。

大好きなものをとられるのを嫌がるようなそんな言葉。

だけど、私は
やっぱりその言葉にドキッとはできず

背筋に何か触ったような奇妙な気持ちになるのだった。

2・6話 優しい愛

時が流れ

老いたとしても

自分の心は

変わりはない

レンカ

私が怯えてるのに気づいたのか

気づいてないのか

白梅さんは優しく微笑み

「おち」

と、私の名前を呼んだ。

ゆっくりと視線を白梅さんにあわしてみる。

顔が近すぎて

すぐにそらしてしまったけど、

白梅さんは気にしてないと言っかのように
優しく微笑み続けている。

白梅さんは私の髪を手に巻き付けては

離してを繰り返して遊びながら

「愛してますよ、さち」

と囁いた。

いつも突然言われる

それに私が恥ずかしさを感じていると

白梅さんは何を思ったのか

髪で遊んでいた手を私の頬におき

見たこともない目をしながら微笑んだ。

熱のこもった目に

私の中の何かが

逃げると叫んでいるが

すでに遅かったと思う。

2・7話 妖怪

愛すること

愛されること

愛そつと思つこと

愛されたいと思つこと

全て素晴らしいこと

レンカ

頬をゆつくりと撫でながら白梅さんは
優しく微笑み私に言い聞かせるように呟く。

「愛してます。鎖で繋いで閉じ込めてしまいたいほど愛してるんです。あなたが他の誰かを見ることすら許せません」

ぞわりと体が震えた。

その言葉が私に恐怖を与えるのに気づいているのだろうか。

そう思いながら私は白梅さんの言葉を静かに聞いていた。

撫でていた手を首に移動させながら

白梅さんは続けて言う。

それは私が初めて聞くことだった。

「僕はあなたを愛してます。この言葉に偽りはありません。だけど、僕は鬼です。妖怪なんです。

だから人がどう愛を伝えあうのかわかりません。僕はあなたを殺したいほど愛してるのにこの思いをどうやって伝えるのかわかりません」

白梅さんが言い終わった時、私は困惑した顔をしていただろう。

後半の言葉なんて聞こえてないほどに

頭の中はパニックになっていた。

鬼？妖怪？

それってどういう意味だった？

ぐるぐると頭の中で単語の意味を調べていると

そんな私の困惑に気づいたのか白梅さんは苦笑いを浮かべながら体を起こしてベッドから降りた。

私も体を起こして白梅さんに視線をあわせる。

白梅さんは少しベッドから距離をとったかと思つとこちらを振り返り

「見ててください」

そう言つて

鬼化つて言うのだろうか

力を解放して鬼の姿を見せてくれた。

短かつた髪は腰まで伸び、耳の少し上あたりには角が生えていた。

それ以外は普段の白梅さんと変わらない。

だけど、十三センチほどの角は

普通の人である私達には無いはずのもの。

それがあると言つことは白梅さんが妖怪だという証明になった。

「……………本当に鬼なんですな」

白梅さんに確認すると白梅さんは笑顔で頷いた。

この日、初めて私は彼が妖怪であることを知った。

2 - 8話 異常

藍 哀 相 合 哇 噫 埃 始 娃 挨 曖 欵 矮 穢 藹
逢 阨 隘 靄 靉 鞋 会 合 逢 遇 遭 阿 井
亜 依

沢山のあいがあるけど

自分は

あなたを

愛 したい

レンカ

彼が妖怪だという事がわかった。

それは吃驚する事だったけど

だからといって彼を嫌悪する理由にはならない。

ただ疑問が溢れてくるだけ。

どうして私を殺さないのか、とか。

妖怪とは人を食べる生き物じゃないのか、とか。

私が色々疑問に思いながらポーツとしていると

鬼化したままの白梅さんは困ったような顔をして言った。

「……今なら、どんな質問にも答えますから何か言ってください」

少しの間をあけてから

「どうして、ここに私を閉じ込めたんですか？」

私はそう聞いた。

ずっと前から聞きたかったのだ。

どうして私を閉じ込めているのか。

白梅さんはきょとんとしたような顔をして首をかしげながら答えた。

「愛してるからですよ？」

どうして

そこに繋がるのかわからず私も首をかしげて聞き返す。

「愛してるからですか？」

白梅さんは私のその問いにくくりと頷いてから

「愛しい人が他の人の目に、しかも知らない男の目に写るなんて許せません。それに閉じ込めてしまえばあなたが何をしたのかくらいは分かりますから」

当たり前のことのように言った。

「……それって監禁って言いませんか？」

恐る恐るそう聞くと

白梅さんは平然と答える。

「さあ？知りませんよ。僕からすれば足枷や首輪をつけてないだけ我慢してるつもりなんですが」

わからない。わかりたくもない答えに私は

恐怖以上に諦めたくなった。

この人はきつと一生変わらない。

そう思わせるぐらい白梅さんの心はおかしい。

正しく言い表すなら

異常だろう。

そんな風に思っていると

ふと、ある疑問が私のなかに浮かんできた。

それは私が前、付き合いっていた人達の事。

付き合いっていたと言っても友人付き合いとかそういうものだが

彼等、彼女等が大怪我をしていたのはもしかして……。

頭の中では聞くなと言つなという言葉が浮かんでくるが私はそれを無視して聞いてしまった。

「あの……私と交遊関係のあった人達が大怪我をしていたのって……」

白梅さんが何かしたんですか？

最後まで言葉を繋げるより前に鬼化からもとの姿に戻った白梅さんは

私に真正面から抱きつきながら

特に何の感情も込めずに

「ああ、はい。僕が殺しましたよ？」

と、言った。

2・9話 最後

君をおいて死ぬのは

悲しい

君が先に逝くのは

辛い

だから

一緒に逝こうか

レンカ

殺した。

彼がそう答えた時、一瞬聞き間違いかと思った。

私が聞いたのは大怪我をさせたか、ということだけ。

なのに彼は

「ああ、はい。僕が殺しましたよ」

そう言ったから。

いや、それは違うかな。

聞き間違っただのと自分が思いたかっただけなんだろう。

仲がよかつただけの何の罪もない人が

私のせいで殺された。

そんなこと知りたくなかった。

ぐちゃぐちゃに思考が塗り潰されて

頭が正常に動かなくなっていく。

つうつと頬に涙が伝うのを感じて私は泣いてることに気づいた。

感情の制御もうまくできなくなっているみたいだ。

白梅さんは、ぽんぽんと私の背中を叩きながら

現実から目を逸らすことを許さないと言うように

私が聞きたくない事を教えてくれた。

「足を切り落として。

手を刺して。

耳を削ぎ落とし。

目を抉って。

喉を潰して。

色々しましたが不運にも大怪我をしていたので僕が与えた少しの痛みでさえ苦しかったでしょうね。

あなたが知らなかったのは誰もあなたに知らせなかったからだと思いますよ？

大怪我をした翌日に死亡した。なんて、言いたくないし、伝えにくいことでしょうから」

「わ、私の、せい？」

声がつまみ紡げなくなっている。

そこまで彼が私に執着し、依存するから回りが巻き込まれたんだ。

だから全部私が原因ってことになる。

だけど、白梅さんはその言葉に首を横に振った。

「あいつらが死んだのは

あなたを利用しようとしたからで。

あなたを好きになったからで。

つまり、自業自得なんです。あなたが原因ではありません」

白梅さんの言葉を聞いてもやっぱり私が原因だろうとわかったただけだ。

やっぱり私が原因ってことですね。

そう言おうと思って口を開いたけど

声を出す前に口を白梅さんの口で塞がれた。

舌を無理矢理絡ませながら深くキスをしてくる白梅さんに吃驚して涙が止まる。

離してほしくて白梅さんの体を叩くと

抱き締めてる状態はそのままだが

白梅さんは簡単にキスするのを止めた。

私の口からどちらのかも

わからない唾液が顎に伝うのを

嬉しそうにぬぐいながら彼は言う。

「死んだ人のことなんて考えないでください。今もこれからもあなたは僕だけのことを考えていてください。どんな君だって僕は愛せるんですから」

それは何度も聞いてきた愛の言葉。

彼の愛を拒むのに諦めてしまった私は

「わかり、ました」

その言葉に頷く以外

選択肢はなかった。

END……？

2・9話 最後（後書き）

一応、最終話です。

白梅的にはハッピーエンドで

さち的にはハッピーエンドなのか微妙ですね。

これからは番外編を書いていこうと思います。

御伽噺（前書き）

白梅の過去の話……だと思います。

御伽噺

一つ、小さな座敷牢

二つ、骸を傍らに

三つ、賽子転がして

四つ、白華咲かせましょう

オトギバナシ

ある山の奥の奥に大きなお屋敷がありました。

そこには

鬼と呼ばれるものたちの当主が住んでおりました。

鬼の当主には

四人の子供がおったそうです。

長女であります一人目の子供は黒い髪に赤黒い目の姿に鬼にとっては致命的である角の無い子供でございました。

親もそうそうに彼女を見放しました。

角が無いと言うことは人と変わらぬ力、つまり魔力が零だからです。

魔力が無いものは簡単に他の妖怪に殺されてしまいますし結婚の道具にもなりません。

ですから、当主に見放されたのでしょう。

次女であります二人目の子供は灰色の髪に灰色の目のそこそこ力の強い子供にございました。

ですが、女が当主になることはできません。

彼女は結婚の道具にされるだけでした。

長男であります三人目の子供は黒い髪に灰色の目の当主には及びませんが力の強い子供にございました。

皆も彼を次の当主だと思いましたが

末っ子にございます四人目の子供が生まれた時、誰もが意見を変えました。

次男であります四人目の子供は白い髪に赤みがかった桃色の目の当主より力の強い子供にございました。

長男よりも彼を当主と言う声に反対される声はございません。

力の強いものが上に立つ。

当然の心理です。

ですが、やはり他の三人は気にくわないはずですが
あとから生まれてきたのにどうしてあいつだけが

と恨めしく思ったはずですよ。

鬼は生まれてすぐに名前を貰いません。

力が衰える場合もあるので五つになってから名前を貰うのですが

四人目の子供は生まれてすぐに名前を貰っていました。

それも三人にとって恨みが強くなる原因でした。

三人はついに

四人目の子供を座敷牢に入れ、一度も外に出さないようにしました。

勿論、親も回りもそれを止めません。

厳しい環境でも死ぬことが無いことを知っているからです。

与えるのは少しの食事と遊ぶための汚れた毬、そして面白くもない
本だけでした。

そんな風に一人、隔離されていたからでしょうか。

四人目の子供は無邪気な恐ろしさが心に芽生えました。

他人の命など平気で踏み潰すことができるようになったのです。

その証拠に

彼は三人の子供を殺し、その首を親の前に差し出してから笑顔でこう言ったのです。

「汚い血がついたので新しい着物をください」

と。当たり前のように着物の心配をしていたのです。

親はあの時、閉じ込めるのを止めれば良かったとその言葉を聞いて思いました。

その後、彼が当主になったのか誰も知りません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190y/>

鬼遊び

2011年11月27日18時54分発行